《翻刻》夏目漱石「琴のそら音」完成原稿

渋谷　百合絵

はじめに

夏目漱石「琴のそら音」は明治三八年五月に雑誌『七人』第七号（七人発行所）に発表された作品である。本作の原稿について、このたび所蔵者の方のご了承のもと、翻刻する機会を得た。本原稿の最終形態が初出本文とほぼ同一であることから、完成原稿であると判断できる。なお『漱石全集』（第二巻、岩波書店、一九九四年）収録本文は、本原稿の最終形態を底本として作成されている。[1]

原稿は松屋製で、枠左下に「十二ノ廿五（松屋製）」とあり、一行二五字二四行の六〇〇字詰原稿用紙に書かれている。タイトルのみ付された頁を合わせて三八枚。筆記用具は、一部注記で記した箇所以外はすべて黒ペンによって記されている。

本稿では第一節で原稿の翻刻を示し、その後に第二節で原稿の削除、書き直し、加筆の傾向や、そこから読み取りうることについて記した。

一　「琴のそら音」完成原稿翻刻

【凡例】

・原則として、漢字や仮名は適宜通行の字体に改めたが、仮名遣いは原文に従った。

・改行や字下げは、原則として原稿に従った。各原稿には第一葉から順に①、②のように頁数を示した。各原稿に付されたノンブルについては注記に示し、[2]ページの割付等の編集記号については省略した。また、蔵書印については注記に示した。[3]

・本文中に用いられている「　」や傍点に関しては漱石の用い

た表記をそのまま記したが、それ以外の記号は、次の方針に基づいて新たに用いた。

〔　〕→抹消された表現を示す。丹念に塗りつぶされたものも、判読の可能なものはできうるかぎり表記した。

傍線→抹消部分の訂正や、挿入のため、行間などに書き加えられた表現を示す。

□→判読不可能な文字を示す。

《翻刻》

①　琴[4]のそら音　　夏目嗽石

〔三十八年四月稿〕

②　琴[5]のそら音　　夏目嗽石

「珍らしいね、久しく来なかつたぢやないか」と津田君が出過ぎた洋燈の穂を細めながら尋ねた。

津田君がかう云つた時、余ははち切れて膝頭の出さうなヅボンの上で、相馬焼の茶碗の糸底を三本指でぐる〳〵廻し〔て居〕ながら考へた。成程珍らしいに相違ない、此正月に顔を合せたぎり、花盛りの今日迄津田君の下宿を訪問した事はない。

「来やう〳〵と思ひながら、つい忙がしいものだから――」

「そりあ、忙がしいだらう、何と云つても学校に居たうちとは違ふからね、此頃でも矢張り午後六時迄かい」

「まあ大概その位さ、家へ帰つて飯を食ふとそれなり寐て仕舞ふ。勉強所か湯にも碌々這入らない位だ」と余は茶碗を畳の上へ置いて、卒業が恨めしいと云ふ顔をして見せる。

津田君は此一言に少々同情の念を起したと見えて「成程少し瘠せた様だぜ、余程苦しいのだらう」と云ふ。〔当人を見ると〕気のせい〔精〕か当人は学士になつてから少々肥つた様に見えるのが癪に障る。机の上に何だか面白さうな本を広げて右の頁の上に〔□〕鉛筆で註が入れてある。こんな閑があるかと思ふと羨しくもあり、忌々しくもあり、同時に吾身が恨めしくなる。

「君は不相変勉強で結構だ、其読みかけてある本は何かね。ノート抔を入れて大分叮嚀に調べて居るぢやないか」

「是か、なに是は幽霊の本さ」と津田君は頗る平気な顔をして[3]居る。此忙しい世の中に、流行りもせぬ幽霊の〔著〕書〔抔〕物を済して愛読する抔といふのは、呑気を通り越して贅沢の沙汰だと思ふ。

「僕も気楽に幽霊でも研究して見たいが、――どうも毎日芝から小石川の奥迄帰るのだから研究は愚か、自分が幽霊になりさう〔に〕な位さ。考へると心細くなつて仕舞ふ。」

「さうだつたね、つい忘れて居た。どうだい新世帯の味は。一

戸を構へると自から主人らしい心持がするかね。」と津田君は幽霊を研究する丈あつて心理作用に立ち入つた質問をする。

「あんまり主人らしい心持もしないさ。矢ッ張り下宿の方が気楽でいゝ様だ。あれでも万事整頓して居たら旦那の心持と云ふ特別な心持になれるかも知れんが、何しろ真鍮の薬罐で湯を沸かしたり、ブリッキの金盥で顔を洗つてる内は主人らしくないからな」と実際の所を白状する。

「夫でも主人さ。是が俺のうちだと思へば何となく愉快〔な者〕だらう。〔一〕所有と云ふ事と愛惜といふ事は大抵の場合に於て伴なうのが原則だから。」と津田君は心理学的に人の心を説明して呉れる。〔元来〕学者と云ふものは頼みもせぬ事を一々説明してくれる者である。

「俺の家だと思へばどうか知らんが、てんで俺の家だと思ひ度ないんだからね。そりや名前丈は主人に違ひないさ。だから門口にも僕の名刺丈は張り付けて置いたがね。七円五十銭の家賃の主人なんざあ、主人にした所が見事な主人ぢやない。主人中の属官なるものだあね。主人になる④なら勅任主人か少なくとも奏任主人にならなくつちや愉快はないさ。只下宿の時分より面倒が殖える許りだ」と深くも考へずに浮気の不平丈を発表〔する。〕して相手の気色を〔□〕窺ふ。向ふが少しでも同意したら、すぐ不平の後陣を繰り出す積りである。

「成程真理は其辺にあるかも知れん。下宿を続けて居る僕と、新たに一戸を構へた君とは自から立脚地が違ふからな」と言語は頗る六づかしいが兎に角余の説に賛成丈はしてくれる。此模様なら、もう少し不平を陳列しても差し支はない。

「先づうちへ帰ると婆さんが横〔と〕綴ぢの帳面を持つて僕の前へ出てくる。今日は御味噌を三銭、大根を二本、鶉豆を一銭五厘買〔い〕ひました〔抔〕と精密なる報告をするんだね。厄介極まるのさ」

「厄介極まるなら廃せばいゝぢやないか」と津田君は下宿人丈あつて無雑作な事を言ふ。

「僕は廃してもいゝが婆さんが承知しないから困る。そんな事は一々聞かないでもいゝから好加減にして呉れと云ふと、どう致しまして、奥様の入らつしやらない御家で、御台所を預かつて居ります以上は一銭一厘でも間違ひがあつてはなりません、〔と〕てつて頑として主人の言ふ事を聞かないんだからね」

「夫ぢやあ、只うん〳〵云つて聞いてる振をして居りや、宜からう」〔□〕津田君は外部の刺激の如何に関せず心は自由に働き⑤得ると考へて居るらしい。心理学者にも似合しからぬ事だ。

「然し夫丈ぢやないのだからな。精細なる会計報告が済むと、今度は翌日(あした)の御菜に就て綿密なる指揮を仰ぐのだから弱る。」

「見計らつて調理(こしら)へろと云へば好いぢやないか」

「所が当人見計らふ丈に、御菜に関して明瞭なる観念がないのだから仕方がない」

「それぢや君が云ひ付けるさ。御菜のプログラム位訳ないぢやないか」
「夫が容易く出来る位なら苦にやならないさ。僕だつて御菜上の智識は頗る乏しいやね。明日の御みおつけの実は何に致しましせうとくると、最初から即答は出来ない男なんだから……」
「何だい〔お〕御みおつけと云ふのは」
「味噌汁の事さ。東京の婆さんだから、東京流に御みおつけと云ふのだ。先づ其汁の実を何に致しませうと聞かれると、実になり得べき者を〔悉く〕秩序正しく並べた上で選択をしなければならんだらう。一々考へ出すのが第一の困難で、考へ出した品物に就て取捨をするのが第二の困難だ。」
〔°〕「そんな困難をして飯を食つてるのは情ない訳だ。君が特〔ア〕別に数奇なものが無いから困難なんだよ。二個以上の物体を同等の程度で好悪するときは決断力の上に遅鈍なる影響を与へるのが原則だ〔から〕。」と又分り切つた事を態々六づかしくして仕舞ふ。
「味噌汁の実迄相談するかと思ふと、妙な所へ干渉するよ」
「へえ、矢張り食物上にかね」
「うん、毎朝梅干に白砂糖を懸けて来て是非一つ〔宛〕食えッて云ふんだがね。之を食はないと婆さん頗る御機嫌が悪いのさ」
「食へばどうかするのかい」
「何でも厄病除のまじな〔ひ〕ひださうだ〔ム〕。さうして婆さんの理由が面白い。日本中どこの宿屋へ留つても朝、梅干を出さない所はない。まじなひが利かなければ、こんなに一般の習慣となる訳がないと云つて得意に梅干を食はせる〔の〕んだからな」
「成程夫は一理あるよ、凡ての習慣は皆相応の功力があるので維持せらるゝのだから、梅干だつて一概に馬鹿には出来ないさ」
「なんて君迄婆さんの肩を持つた日にや、僕は愈主人らしからざる心持に成つて仕舞はあ」と飲みさしの巻煙草を火〔桶〕鉢の灰の中へ擲き込む。燃え残りのマツチの散る中に、白いものがさと動いて斜めに一の字が出来る。
「兎に角旧弊な婆さんだな」
「旧弊はとくに卒業して迷信婆々さ。何でも月に二三返は伝通院辺の何とか云ふ坊主の所へ相談に行く様子だ」
「親類に坊主でもあるのかい」
「なに坊主が小遣取りに占ひをやるんだがね。其〔ロ〕坊主が又余慶な事許り言ふもんだから始末に行かないのさ。現に僕が家を持つ時抔も鬼門だとか八方塞りだとか云つて大に弱らしたも〔の〕んだ」
「だつて家を持つてから其婆さんを雇つたんだらう」
「雇つたのは引き越す時だが約束は前からして置いたのだからね。実はあの婆々も四谷の宇野の世話で、是なら大丈夫だ独りで留守をさせても心配はないと母が云ふから極めた訳さ」

「夫なら君の未来の妻君の御母さん〔□〕の御眼鏡で人撰に預つた婆さんだから慥かなもんだらう」
「人間は慥かに相違ないが迷信には驚いた。何でも引き越すと云ふ三日前に例の坊主の所へ行つた見(ママ)て貰つたんださうだ。すると坊主が今本郷から小石川の方へ向いて動くのは甚だよくない、屹度家内に不幸があると云つたんだがね。――余慶な事ぢやないか、何も坊主の癖にそんな知つた風な妄言を吐かんでもの事だあね。」
「然しそれが商買だから仕様がない」
「商買なら勘弁してやるから、金丈貰つて当り障りのない事を喋舌るがいゝや」
「さう怒つても僕の咎ぢやないんだから埒はあかんよ」
「其上若い女に〔崇(6)〕崇ると御負けを附加したんだ。さあ婆さん驚くまい事か、僕のうちに若い女があるとすれば近い内貰ふ筈の宇野の娘に相違ないと自分で見解を下して独りで心配して居るのさ」
「だつて、まだ君の所へは来んのだらう」
「来んうちから心配をするから取越苦労さ」
「何(7)だか洒落か真面目か分らなくなつて来たぜ」
「丸で御話にも何もなりやしない。所で近頃僕の家の近辺で野良犬が遠吠をやり出したんだ。〔□〕……」
「〔一寸待ち給へ〕犬の遠吠と婆さんとは〔どんな〕何か関係がある〔んだい〕のかい。僕に〔は〕は聯想さへ浮ばんが」と津田君は如何に得意の心理学でも是は説明が出来悪いと〔云ふ〕一寸眉を寄せる。余はわざと落ち付き払つて御茶を一杯と云ふ。相馬焼の茶碗は安くて俗な者である。もとは貧乏士族が内職に焼いたとさへ伝聞して居る。津田君が三十匁の出〔□〕売を浪々此安茶碗についでくれた時余は何となく厭な〔気〕心持がして飲む気がしなくなつた。茶碗の底を見ると狩野法眼元信流の馬が勢よく跳ねて居る。安いに似合はず活溌な馬だと感心はしたが、馬に感心(マ)しからと云つて飲みたくない茶を飲む義理もあるまいと思つて茶碗は手に〔持〕取らなかつた。
「さあ飲み給へ」と津田君が促がす。
「此馬は中々勢がいゝ。あの尻尾を振つて鬣を乱して居る所は野馬だね」と茶を飲まない代りに馬を賞めてやつた。
「冗談ぢやない、婆さんが急に犬にな〔つて〕るかと思ふと、犬が急に馬になるのは烈しい〔よ〕。夫からどうしたんだ」と頻りに後を聞きたがる。茶は飲まんでも差し支へない事となる。
「婆さんが云ふには、あの鳴き声は只の鳴き声ではない、何でも此辺に変があるに相違ないから用心しなくてはいかんと云ふのさ。然し用心をしろと云つたつて別段用心の仕様もないから打ち遣つて置くから構はないが、うるさいには閉口だ」
「そんなに鳴き立てるのかい」
「(9)なに犬はうるさくも何ともないさ。第一僕はぐう〳〵寐て仕

舞ふから、いつどんなに吠えるのか全く知らん位さ。然し婆さんの訴へは僕の起きて居る時を択んで来るから面倒だね」
「成程如何に婆さんでも君の寐て居る時をよつて御気を御付け遊せとも云ふまい。」
「所へもつて来て、僕の未来の細君が風邪を引いたんだね。丁度婆さんの御誂通に事件が湊合したからたまらない。」
〔°〕「それでも宇野の御嬢さんはまだ四谷に居るんだから心配せんでも宜さゝうなものだ」
「それを心配するから迷信婆々さ。あなたが御移りにならんと御嬢様の御病気がはやく御全快になりませんから是非此月中に〔□〕方角のい、所へ御転宅遊ばせと云ふ訳さ。飛んだ預言者に捕まつて、大迷惑だ」
「移るのもい、かも知れんよ」
「馬鹿あ言つてら、此間越した許りだね。そんなに度々引越し〔許り〕をし〔て居〕たら身代限をする許りだ」
「然し病人は大丈夫かい」
「君迄妙な事を言ふぜ。少々伝通院の坊主にかぶれて来た〔ぜ。〕んぢやないか。そんなに人を嚇かすもんぢやない。」
「嚇かすんぢやない、大丈夫かと聞くんだ。是でも君の妻君の身の上を心配した積なんだよ」
「大丈夫に極つてるさ。咳嗽は少し出るがインフルエンザなんだもの」
「⑩インフルエンザ?」と津田君は突然余を驚かす程な大きな声を出す。今度は本当に嚇かされて、無言の侭津田君の顔を見詰める。
「よく注意し給へ」と二句目は低い声で云つた。初めの大きな声に反して此低い声が、耳の底〔から〕をつき抜けて頭の中へしんと浸み込んだ様な気持がする。何故だか分らない。細い針は根迄這入る、低くても透る声は骨に〔も〕答へるのであらう。碧瑠璃の大空に瞳程な黒き点をはたと打〔つ〕たれた様な心持ちである。消えて失せるか、溶けて流れるか、武庫山卸しにならぬとも限らぬ。此瞳程な点の〔行方〕運命は是から津田君の〔是からの言葉で〕説明で決せられるのである。余は覚えず相馬焼の茶碗を〔執〕取り上げて冷たき茶を一時にぐつと飲み干した。
「注意せんといかんよ」と津田君は再び同じ事を同じ調子で繰り返す。瞳程な点が一段の黒味を増す。然し流れるとも広がるとも片付かぬ。
「縁喜でもない、いやに人を驚かせるぜ。ワハ、、、、」と無理に大きな声で笑つて見せたが、腑の抜けた勢のない声が無意味に響くので、我ながら気が付いて中途でぴたりと已めた。やめると同時に此笑が愈不自然に聞かれたので矢張り仕舞迄笑ひ切れば善かつたと思ふ。津田君は此笑を何と聞たか知らん。再び口を開いた時は依然として以前の調子である。

「いや実は斯う云ふ話がある。つい此間の事だが、僕の親戚の者が矢張りインフルエンザに罹つてね。別段の事はない[11]と思つて好加減にして置いたら、一週間目から肺炎に変じて、とう〳〵一ヶ月立たない内に死んで仕舞つた。其時医者の話さ、此頃のインフルエンザは性(たち)が悪い、ぢきに肺炎になるから用心をせんといかんと云つたが〔ね。〕――実に夢の様さ。可哀さうでね」と言ひ掛けて厭な寒い顔をする。

「へえ、それは飛んだ事だつた。どうして又肺炎抔に変じたのだ」と心配だから参考の為め聞いて置く気になる。

「どうしてって、別段の事情もないのだが――夫だから君のも注意せんといかんと云ふのさ」

「本当だね」と余は満腹の真面目を此四文字に籠めて、津田君の眼の中を熱心に覗き込んだ。津田君はまだ寒い顔をして居る。

「いやだ〳〵、考へてもいやだ。二十二や三で死んでは実に詰らんからね。しかも〔夫〕所天は戦争に行つてるんだから――」

「ふん、女か？　〔夫〕そりや気の毒だなあ。軍人だね」

「うん〔夫〕所天は陸軍中尉さ。結婚してまだ一年にならんのさ。僕は通夜にも行き葬式の供にも立つたが――〔女〕其夫人の御母さんが泣いてね――」

「泣くだらう、誰だつて泣かあ」

「丁度葬式の当日は雪がちら〳〵降つて寒い日だつたが、御経が済んで愈棺を埋める段になると、御母さんが穴の傍へしやがんだぎり動かない。雪が〔□〕飛んで頭の上が斑になるから、僕が〔編〕蝙蝠傘をさし懸けてやつた」

「それは感心だ、君にも似合はない優しい事をしたものだ」

「だつて気の毒で見て居られないもの」

「[12]〔ち〕さうだらう」と余は又法眼元信の馬を見る。自分ながら此時は相手の寒い顔が伝染して居るに相違ないと思つた。咄嗟の間に死んだ女の〔夫〕所天の事が聞いて見たくなる。

「それで其〔夫〕所天の方は無事なのかね。」

「〔夫〕所天は黒木軍に附いて居るんだが、此方はまあ幸に怪我もしない様だ」

「細君が死んだと云ふ報知を受取つたら嘸驚いたらう」

「いや、〔夫〕それに付いて不思議な話があるんだが〔。〕ね、日本から手紙の届かない先に細君がちやんと亭主の所へ行つて居るんだ」

「行つてるとは？」

「逢ひに行つてるんだ」

〔ど〕「どうして？」

「どうし〔□〕てつて、逢ひに行つたのさ」

「逢ひに行くにも何にも当人死んでるんぢやないか」

「死んで逢ひに行つたのさ」

「馬鹿あ云つてら、いくら亭主が恋しいつたつて、そんな芸が誰に出来るもんか。丸で林屋正三の怪談だ」

「いや実際行つたんだから仕様がない」と津田君は教育ある人にも似合ず、頑固に愚な事を主張する。
「仕様がないつて――何だか見て来た様な事を云ふぜ。可笑しいな、君本当にそんな事を話してるのかい」
「無論本当さ」
「是りや驚いた。丸で僕のうちの婆さんの様だ」
[13]「婆さんでも爺さんで事実だから仕方がない」と津田君は愈躍起になる。どうも余〔を〕にからかつて居る様にも見えない。はてな真面目で云つて居るとすれば何か曰くのある事だらう。津田君と余は大学へ入つてから科は違ふたが、高等学校では同じ組に居た事もある。其時余は大概四十何〔番〕人の席末を汚すのが例であ〔□〕つたのに、先生は歸然として常に二三番を下らなかつた所を以て見ると、頭脳は余よりも三十五六枚方明晰に相違ない。其津田君が躍起になる迄弁護するのだから満更の出鱈目ではあるまい。余は法学士である、刻下の〔用〕事件を有の侭に見て常識で捌いて行くより外に〔□〕思慮を廻らすのは能はざるよりも寧ろ好まざる所である。幽霊だ、〔崇〕崇だ、因縁だ抔と雲を摑む様な事を考へるのは一番嫌である。が津田君の頭脳には少々恐れ入つて居る。其恐れ入つてる先生が真面目に幽霊談をすると〔す〕なると、余も此問題に対する態度を義理にも改めたくなる。実を云ふと幽霊と〔辻籠〕雲助は維新以来永久廃業したものとのみ信じて居たのである。然るに先刻から津田君の容子を見ると、何だか此幽霊なる者が余の知らぬ間に再興された様にもある。先刻机の上にある書物は何かと尋ねた時にも幽霊の書物だとか答へた〔□〕と記憶する。兎に角損はない事だ。忙がしい余に取つてはこんな機会は又とあるまい、後学の為め話丈でも拝聴して帰らうと漸く肚の中で決心した。〔津〕見ると津田君も話の続きが話したい〔様〕と云ふ風である。話したい、聞きたいと事が極れば訳はない。漢水は依然として西南に流れる〔。〕のが千古の法則だ。
[14]「段々聞き糺して見ると、其妻君と云ふのが夫の出征前に誓つたのださうだ」
「何を？」
「もし万一御留守中に病気で死ぬ様な事がありましても只は死にませんて」
「へえ」
「必ず魂魄丈は御傍へ行つて、もう一遍御目に懸りますと云つた時に亭主は軍人で磊落な気性だから笑ひながら、よろしい、何時でも来なさい、戦さの見物をさしてやるからと云つたぎり満洲へ渡つたんだがね。其後そんな事は丸で忘れて仕舞つて一向気にも掛けなかつたさうだ」
「さうだらう、僕なんざ軍さに出なくつても忘れて仕舞はあ。」
「それで其男が出立をする時細君が色々手伝つて手荷物抔を買つてやつた中に、懐中持の小さい鏡があつたさうだ」

「ふん。君は大変詳しく調べて居るな」
「なにあとで戦地から手紙が来たので其顛末が明瞭になつた訳だが。――其鏡を先生常に懐中して居てね」
「うん」
「ある朝例の如くそれを取り出して何心なく見たんださうだ。すると其鏡の奥に写つたのが――いつもの通り髭だらけな垢染た顔だらうと思ふと――不思議だねえ――実に妙な事があるぢやないか」
「どうしたい」
「[15]青白い細君の病〔中□〕気に窶れた姿がスーとあらはれたと云ふんだがね――いえ夫は一寸信じられんのさ、誰〔でも〕に聞かしても嘘だらうと云ふさ。現に僕抔も其手紙を見る迄は信じない一人であつたのさ。然し向ふで手紙を出したのは無論こちらから死去の通知の行つた三週間も前なんだぜ。嘘をつくつたつて嘘にする材料のない時ださ。夫にそんな嘘をつく必要がないだらうぢやないか。死ぬか生きるかと云ふ戦争中にこんな小説染た呑気な法螺を書いて国元へ送るものは一人もない訳ださ。」〔それに〕
「そりや無い」と云つたが実はまだ半信半疑である。半信半疑ではあるが何だか物凄い、気味の悪い、一言にして云ふと法学士に似合はしからざる感じが起つた。
「尤も話しはしなかつた〔□〕さうだ。黙つて鏡の裏から夫の顔をしけ〴〵見詰めたぎりださうだが、其時夫の胸の中に訣別の時、細君の言つた言葉が渦の様に忽然と湧いて出たと云ふんだが、こりやさうだらう。焼小手で〔頭〕脳味噌をじゅつと焚かれた様な心持だと手紙に書いてあるよ。」
「妙な事があるものだな」〔と〕手紙の文句迄引用されると是非共信じ〔度〕なければならぬ様になる。何となく物騒な気合である。此時津田君がもしワッとでも叫んだら余は屹度飛び上つたに相違ない。
「それで時間を調べて見ると細君が息を引き取つたのと夫が鏡を眺めたのが同日同刻になつて居る」
「愈不思議だな」是時に至つては真面目に不思議と思ひ出した。[16]
「然しそんな事が有り得る事かな」と念の為め津田君に聞いて見る。
「こゝにもそんな事を書いた本があるがね」と津田君は先刻の書物を机の上から取り卸しながら「近頃〔の説〕ぢや、有り得ると云ふ事丈は証明されさうだよ」と〔云〕落ち付き払つて答へる。法学士の知らぬ間に心理学者の方では幽霊を再興して居るなと思ふと幽霊も愈馬鹿に出来なくなる。知らぬ事には口が出せぬ、知らぬは無能力である。幽霊に関しては法学士は文学士に盲従しなければならぬと思ふ。
「遠い距離に於てある人の脳の細胞と、他の人の細胞が感じて一種の化学的変化を起すと……」

「僕は法学士だから、そんな事を聞いても分らん。要するに〔□〕さう云ふ事は理論上あり得るんだね」余の如き頭脳不透明なものは理窟を承るより結論丈呑み込んで置く方が簡便である。

「あゝ、つまりそこへ帰着するのさ。それに此本にも例が沢山あるがね、其内でロード、ブロアム[マ]の見た幽霊抔は今の話しと丸で同じ場合〔だ〕に属するものだ。中々面白い。君ブローアムは知つて居るだらう」

「ブローアム？　ブローアムたなんだい」

「英国の文学者さ」

「〔どうれ〕道理で知らんと思つた。僕は自慢ぢやないが文学者の名なんかシエクスピヤとミルトンと其外に二三人しか知らんのだ」

[17]津田君はこんな人間と学問上の議論をするのは無駄だと思つたか「夫だから宇野の御嬢さんもよく注意し玉ひと云ふ事さ」と話を元へ戻す。

「うん注意はさせるよ。然し万一の事がありましたら屹度御目に懸りに上りますなんて誓は立てないのだから其方は大丈夫だらう」と洒落て見たが心の中は何となく不愉快であつた。時計を〔見〕出して見ると十一時に近い。是は大変、うちでは嘸婆さんが犬の遠吠を苦にして居るだらうと思ふと、一刻も早く帰りたくなる。「いづれ其内婆さんに近付になりに行くよ」と云ふ津田君に「御馳走をするから是非来給へ」と云ひながら白山御殿町の下宿を出る。

我からと惜気もなく咲いた彼岸桜に、愈春が来たなと浮〔□〕かれ出したのも僅か二三日の間である。今では桜自身さへ早待つたと後悔して居るだらう。生温く帽を吹く風に、額際から煮染み出す膏〔を〕と、粘り着く砂埃りと〔共〕を一所に拭ひ去つた一昨日の事を思ふと、丸で去年の様な心持ちがする。それ程きのふから寒くなつた。今夜は一層である。冴返る抔と云ふ時節でもないに馬鹿々々敷と外套の襟を立てゝ盲唖学校の前から植物園の横をだら〳〵と下りた時、どこで撞く鐘だか〔知らぬが〕夜の中に波を描いて、静かな空をうねりながら来る。十一時だなと思ふ。——時の鐘は誰が発明したものか知ら〔ぬ〕ん〔が〕。今迄は気が付かなかつたが注意して聴いて見ると妙な響である。一つ音が粘り強い餅を引き〔数千〕千切つた様に幾つにも割れてくる。割れたから縁が絶えたかと思ふと細くなつて、[18]次の音に繋がる。繋がつて太くなつた〔□〕かと思ふと、又筆の穂の様に自然と細くなる。——あの音はいやに伸びたり縮んだりするなと考へながら歩行くと、自分の心臓の鼓動も鐘の波のうねりと共に伸びたり縮んだりする[8]様に感ぜられる。仕舞には鐘の音に己が呼吸を合せ度なる。今夜はどうしても法学士らしくないと、足早に交番の角を曲るとき、冷た〔さ〕い風に誘はれてポツリと大粒の雨が顔にあたる。

極楽水はいやに陰気な所である。近頃は両側へ長家が建つたの

で昔程淋しくはないが、その長家が左右共閲然として空家の様に見えるのは余り気持のいゝものではない。貧民〔と〕に活動はつき物である。働〔かない〕いて居らぬ貧民は、貧民たる本性を遺失して生きたものとは認められぬ。余が通り抜ける極楽水の貧民は打てども蘇み返る景色なき迄に静かである。――実際死んで居るのだらう。ポツリ〳〵と〔風〕雨は漸く濃かになる。傘を持つて来なかつた、殊によると帰る迄にはずぶ濡になる哩と舌打をしながら空を仰ぐ。雨は闇の底から蕭々と降る、容易に晴れさうにもない。

五六間先に忽ち白い者が見える。〔余が〕往来の真中に立ち留つて、首を延して此白い者をすかして〔見たときに〕〔て〕居る〔と〕うちに、白い者は容赦もなく余の方へ進んでくる。半分と立たぬ間に余の右側を掠める如く過ぎ去つたのを見ると――蜜柑箱の様なものに白い巾をかけて、黒い着物をきた男が二人、棒を通して前後から担いで行くのである。〔男〕[9]大方葬式か焼場〔へ〕で〔も行くので〕あらう。箱の中のは〔小供で〕乳飲子に違ひない。黒い男は[19]互に言葉も交へずに黙つて此棺桶を担ついで行く。天下に夜中棺桶を担ふ程、当然の出来事はあるまいと、思ひ切つた〔様に〕調子でコツ〳〵担いで行く。〔暫く〕闇に消える棺桶を暫くは物珍らし気に見送つて振り返つた時、又行手から人声が聞え出した。高い声でもない、低い声でもない、夜が更けて居るので存外反響が烈しい。

「昨日生れて今日〔□〕死ぬ奴もあるし」と一人が云ふと「寿命だよ、全く寿命だから仕方がない」と一人が答へる。二人の黒い影が又余の傍を掠めて見る間に闇の中へもぐり込む。棺の後を追つて足早に刻む下駄の音のみが雨に響く。

「昨日生れて今日死ぬ奴もあるし」と余は胸の中で繰り返して見た。昨日生れて今日死ぬ者さへあるなら、昨日病気に罹つ〔た者は〕て今日死ぬ者は固よりあるべき筈である。二十六年も娑婆の気を吸つたものは病気に罹らんでも充分死ぬ資格を具へて居る。かうやつて極楽水を四月三日の夜の十一時に上りつゝあるのは、ことによると死にに上〔□〕つてるのかも知れない。――何だか上りたくない。暫らく坂の中途で立つて見る。然し立つて居るのは、殊によると死に、立つて居るのかも知れない。――又歩行き出す。死ぬと云ふ事が是程人の心を動かすとは今迄つい気が付かなんだ。気が付いて見ると立つても歩行いても心配になる、此様子では家へ帰つて蒲団の中へ這入つても矢張り心配になるかも知れぬ。何故今迄は平気で暮して居たのであらう。考へて見ると学校に居た時分は試験〔□〕とベースボールで死ぬと[20]云ふ事を考へる暇がなかつた。卒業してからはペンとインキと夫から月給の足らないのと婆さんの〔迷信〕苦情で矢張り死ぬと云ふ事を考へる暇がなかつた。人間は死ぬ者だとは如何に呑気な余でも承知して居つたに相違ないが実際余も死ぬものだと感じたのは今夜が生れて以来始めてゞある。〔何だ

か此〕夜と云ふ無暗に大きな黒い者が、〔死の影であつて、余は〕歩行いても立つても〔其影の中に〕上下四方から閉ぢ込め〔られ〕て居て、〔今に□□〕其中に〔に融和して〕余と云ふ形体〔が消滅しさうな〕を溶かし込まぬと承知せぬぞと逼る様に感ぜらるゝ。余は元来呑気な丈に正直な所功名心には冷淡な男である。死ぬとしても別に思ひ置く事はない。別に思ひ置く事はないが死ぬのは非常に厭だ、どうしても死に度ない。死ぬのは是程いやな者かなと始め覚つた様に思ふ。雨は段々密になるので外套が水を含んで〔□〕觸ると、濡れた海綿を圧す様に〔□〕じく〳〵する。

竹早町を横つて切支丹坂〔を〕へかゝる。何故切支丹坂と云ふのか分らないが、此坂も名前に劣らぬ怪しい坂である。坂の上へ来た時、ふと先達てこゝを通つ〔た時横の方に〕て「日本一急な坂、命の欲しい者は用心ぢや〳〵」と書いた張札が土手の横からはすに往来へ差し出て居るのを滑稽だと笑つた事を思ひ出す。今夜は笑ふ所ではない。命の欲しい者は用心ぢやと云ふ文句が聖書にでもある格言の様に胸に浮ぶ。坂道は暗い。滅多に下りると滑つて尻餅を搗く。険呑だと八合目あたりから下を見〔る〕て覘をつける。暗くて何もよく見えぬ。左の土手から古榎が無遠慮に枝を突き出して日の目の通はぬ[21]程に坂を蔽〔□〕ふて居るから、昼でも此坂を下りる時は谷の〔中〕底へ落ちると同様あまり善い心持ではない。榎は見えるかなと顔を〔下〕上げて見ると、有ると思へばあり、無いと思へば無い程な黒い者に雨の注ぐ音が頻りにする。此〔□〕暗闇坂を下りて、細い谷道を伝つて、茗荷谷を向へ上つて七八丁行けば小日向台町の余が家へ帰られるのだが、向へ上がる迄がちと気味がわるい。

〔すると〕茗荷谷の坂の中途に当る位な所〔で〕に赤い鮮かな火が見える。前から見え〔出したのか〕て居たのか顔をあげる途端に見えだしたのか判然しないが、兎に角雨を透してよく見える。或は屋敷の門口に立てゝある瓦斯灯ではないかと思つて見て居ると、其火がゆらり〳〵と〔動〕盆灯籠の秋風に揺られる具合に動いた。――瓦斯灯ではない。何だらうと見て居ると今度は其火が雨と闇の中を波の様に縫つて上から下へ動いて来る。――是は提灯の火に相違ない〔。〕と漸く判断した時それが〔ふつと〕〔い〕不意と消えて仕舞ふ。

〔余が〕此火を見た時、余ははつと露子の事を思ひ出した。露子は余が未来の細君の名である。未来の細君と此火とどんな関係があるかは心理学者の津田君にも説明は出来んかも知れぬ。然し心理学者の説明し得るものでなくては思ひ出してならぬとも限るまい。此赤い、鮮かな、尾の消える縄〔□〕に似た火は余をして慥かに余が未来の細君を咄嗟の際に思ひ出さしめたのである。――同時に〔其〕火〔が〕の〔不意に〕消えた〔事が〕瞬間が露子の死を未練もなく拈出した〔のである〕。額を

撫でると膏汗と雨でずる[22]〳〵する。余は夢中であるく。

坂を下り切ると細い谷道で、其谷道が尽きたと思ふあたりから又〔新しく〕向き直つて西へ〳〵と爪上りに新しい谷道がつゞく。此辺は所謂山の手の赤土で、少しでも雨が降ると下駄の歯を吸ひ落す〔位〕程に濘る。暗さは暗し、靴は踵を深く土に据え付けて容易くは動かぬ。曲りくねつて無暗矢鱈に行くと杞枸垣とも覚しきもの丶鋭どく折れ曲る角でぱたりと〔最前の〕又赤い火に出喰はした。〔よく〕見ると巡査である。〔其〕巡査は其赤い火を焼く迄に余〔に〕の頬に押し当て丶「悪るいから御気を付けなさい」と言い棄て丶擦れ違つた。よく注意し給へと云つた津田君の言葉と、悪いから御気をつけなさいと教へた巡査の言葉とは似て居るなと思ふと忽ち胸が鉛の様に重くなる。あの火だ、あの火だと余は息を切らして茗荷谷を馳け上る。どこをどう歩行いたとも知らず流星の如く吾家へ飛び込んだのは十二時近くであらう。三分心の薄暗いランプを片手に奥から駆け出して来た婆さんが頓興な声を張り上げて「旦那様！　どうなさいました」と云ふ。見ると婆さんは蒼い顔をして居る。

「婆さん！　どうかしたか」と余も大きな声を出す。婆さんも余から何か聞くのが怖しく、余は婆さんから何か聞くのが怖しいので御互に〔口〕どうかしたかと〔聞きながら〕問ひ掛けながら、其返答は両方とも云はずに双方とも暫時睨み合つて居る。

「水が――水が垂れます」是は婆さんの注意である。成程充[23]分に雨を含んだ外套の裾と、中折帽の庇から用捨なく冷たい点滴が畳の上に垂れる。折目をつまんで抛り出すと、婆さんの膝の傍に〔茶〕白繻子の裏を天井へ向けて帽が転がる。灰色のチエスターフィールドを脱いで、一振り振つて投げた時はいつもより余程重く感じた。〔漸く〕日本服に着換へて、身顫ひをして漸く余に帰つた頃を見計つて婆さんは又「どうなさいました」と尋ねる。今度は先方も少しは落付いて居る。

「どうするつて、別段どうもせんさ。只雨に濡れた丈の事さ」と可成弱身を見〔□〕せまいとする。

「いへあの御顔色は只の御色では御座いません」と伝通院の坊主を信仰する丈あつて、うまく人相を見る。

「御前の方がどうかしたんだらう。先ッきは少し歯の根が合はない様だつたぜ」

「私は何と旦那様から冷かされても構ひません。――然し旦那〔那〕様雑談事ぢゃ御座いませんよ」

「え？」と思はず心臓が縮みあがる。「どうした〔んだ〕。留守中何かあつたのか。四谷から病人の事でも何か云つて来たのか」

「それ御覧遊ばせ、そんなに御嬢様の事を心配して居らつしやる癖に」

「何と云つて来た。手紙が来たのか、使が来たのか」

「手紙も使も参りは致しません」

「それぢや電報か、」

「電報なんて参りは致しません」
「それぢや、どうした――早く聞かせろ」[24]
「今夜は鳴き方が違ひますよ」
「何が？」
「何がつて、あなた、どうも宵から心配で堪りませんでした。どうしても只事ぢや御座いません」
「何がさ。夫だから早く聞かせろと云つてるぢやないか」
「先達中から申し上げた犬で御座います。」
「犬？」
「えゝ、遠吠で御座います。私が申し上げた通りに遊ばせば、こんな事〔□〕には成らないで済んだんで御座いますのに、あなたが婆さんの〔□〕迷信だなんて、余まり人を馬鹿に遊ばすものですから……」
「こんな事にもあんな事にも、まだ何にも起らないぢやないか」
「いえ、さうでは御座いません、旦那様も御帰り遊ばす途中御嬢様の御病気の事を考へて居らしつたに相違御座いません」と婆さんずばと図星を刺す。寒い刃が暗に閃めいてひやりと胸打を喰はせられた様な心持がする。
「それは心配して来たに相違ないさ」
「それ御覧遊ばせ、矢っ張り虫が知らせるので御座います」
「婆さん虫が知らせるなんて事が本当にあるものかな、御前そんな経験をした事があるかい」
「有る段ぢや御座いません。昔しから人が烏鳴きが悪いとか何とか善く申すぢや御座いませんか」
「成程烏鳴きは聞いた様だが、犬の遠吠は御前一人の様だが――」[25]
「いゝえ、あなた」と婆さんは大軽蔑の口調で余の疑を否定する。「同じ事で御座いますよ。婆や抔は犬の遠吠でよく分ります。論より証拠是は何かあるなと思ふと外れた事が御座いませんもの」
「さうかい」
「年寄の云ふ事は馬鹿には出来ません」
「そりや無論馬鹿には出来んさ。馬鹿に出来んのは僕もよく知つて居るさ。だから何も御前を――然し遠吠がそんなに、よく当るものかな。」
「まだ婆やの申す事を疑つて入らつしやる。何でも宜しう御座いますから明朝四谷へ行つて御覧遊ばせ、屹度何か御座いますよ、婆やが受合ひますから」
「屹度何か有つちや厭だな。どうか工夫はあるまいか」
「夫だから早く御越し遊ばせと申し上げるのに、あなたが余り剛情〔ばかり〕を御張り遊ばすものだから――」
「是から剛情はやめるよ。――兎も角あした早く四谷へ行つて見る事に仕様。今夜是から行つても好いが……」
「今夜入らしつちや、婆やは御留守居は出来ません」

「なぜ？」
「なぜつて、気味が悪くつて居ても起つても居られませんもの」
「それでも御前が四谷の事を心配して居るんぢやないか」
「[26]心配は致して居りますが、私だつて怖しう御座いますから」
折から軒を遶る雨の響に和して、いづくよりともなく〔何物か〕地を這〔て〕うて唸り廻る様な声が聞える。
「あゝあれで御座います」と婆さんが瞳を据えて小声で云ふ。成程陰気な声である。今夜はこゝへ寐る事にきめる。
余は例の如く蒲団の中へもぐり込んだが此唸り声が気になつて瞼さへ合はせる事が出来ない。
普通犬の鳴き声といふものは、後も先も鉈刀で打ち切つた槙雑木を〔積み重ねた様に無意味に連続する。〕長く継いだ直線的の声である。今聞く唸りはそんなに簡単な無雑作の者ではない。声の幅に絶えざる変化があつて、曲りが見えて、丸みを帯びて居る。〔蝋□〕蝋燭の灯の細きより始まつて〔自〕次第に福やかに広がつて又油の尽〔くる〕きた灯心の花と漸次に消えて行く。どこで吠えるか分らぬ。百里の遠き外から、吹く風に乗せられて微かに響くと思ふ間に、近づけば軒端〔に近く〕を〔動かして〕洩れて、枕に塞ぐ耳にも薄る。ウ、、、と云ふ音が丸い段落をいくつも連ねて家の周囲を二三度繞ると、いつし〔□〕か其音がワ、、、〔□〕に変化する拍子、疾き風に吹き〔込め〕除けられて遥か向ふに尻尾はンンンと化して〔□〕闇の世界に入る。陽気な声を無理に圧迫して陰欝にしたのが此遠吠である。躁狂な響を権柄づくで沈痛ならしめて居るのが此遠吠である。自由でない。圧制されて已を得ずに出す声である処が本来の陰欝、天然の沈痛よりも一層厭である、聞き苦しい。余は夜〔著〕着の中に耳の根迄隠した。夜〔著〕着の中でも聞える、而も耳を出して居るより一層聞き苦しい。又顔を出す。
[27]暫らくすると遠吠がはたと已む。此半夜の世界から犬の遠吠を引き去ると動いて居るものは一つもない。吾家が海の底へ沈んだと思ふ位静かになる。静まらぬは吾心のみである。吾心のみは此静かな中から何事〔を〕かを予期しつゝある。去れども其何事なるかは寸分の観念だにない。〔□ら〕性の知れぬ者が此闇の世から一寸顔を出しはせまいかといふ掛念が猛烈に神経を鼓舞するのみである。今出るか、今出るかと考へて居る。髪の毛の間へ五本の指を差し込んで無茶苦茶に掻いて見る。一週間程湯に入つて頭を洗はんので指の股が油でニチゃ〳〵する。此静かな世界が変化したら——どうも変化しさうだ。今夜のうち、夜の明けぬうち何かあるに相違ない。此一秒も待つて過ごす。此一秒も亦待ちつゝ暮らす。何を待つて居るかと云はれては困る。何を待つて居るか自分に分らんから一層の苦痛である。頭から抜き取つた手を顔の前に出して無意味に眺める。爪の裏が垢で薄黒く三日月形に見える。同時に胃嚢が運動を停止して、雨に逢つた鹿皮を天日で乾し堅めた様に腹の中が窮窟になる。

犬が吠えれば善いと思ふ。吠えて居るうちは厭でも、厭な度合が分る。かう静かになつては、どんな〔□〕厭な事が背後に起りつゝあるのか、知らぬ間に醸されつゝあるか見当がつかぬ。遠吠なら我慢する。どうか〔遠〕吠〔に〕えて〔して〕呉れゝばいゝ〔。〕と寐返りを打つて仰向けになる。天井に丸く〔、〕ランプの影か幽かに写る。見ると其丸い影が動いて居る様だ。愈不思議になつて来たと思ふと、〔骨は急に柔かにな〕蒲団[28]の上で脊髄が急にぐにやりとする。只眼丈を見張つて〔此蔭を見〕慥かに動いて居るか、居らぬかを確める。——確かに動いて居る。平常から動いて居るのだが気か付かずに今日迄過し〔□〕たのか、又は今夜に限つて動くのかしらん。——もし今夜丈動くのなら、只事ではない。然し或は腹具合のせいかも知れまい。今日会社の帰りに池の端の西洋料理屋で〔鰕〕海老のフライを食つたが、ことにするとあれが祟つて居るかもしれん。詰らん物を食つて、銭をとられて馬鹿々々しい廃せばよかつた。何しろこんな時は気を落ち付けて寐るのが肝心だと堅く眼を閉ぢて見る。すると虹霓を粉にして振り蒔く様に、眼の前が五色の斑点でちら〳〵する。是は駄目だと眼を開くと又ランプの影が気になる。仕方がないから又横向になつて大病人の如く、〔ぢつ〕眤として夜の明けるのを待たうと決心した。

横を向いて不図目に入つたの〔が〕は、襖の陰に婆さんが叮嚀に畳んで置いた〔□〕秩父銘仙の不断着〔□〕である。此前四谷に行つて露子の枕元で〔四方山の〕例の通り他愛もない話をして居た時、病人が袖口の綻び〔て〕から綿が出懸つて居るのを〔見付けて〕気にして、よせと云ふのを無理に蒲団の上へ起き直つて縫つてくれた事をすぐ聯想する。あの時は顔色が少し悪い許りで笑ひ声さへ常とは変らなかつたのに——当人もう大分好くなつたから明日あたりから床を上げませうとさへ言つたのに——今、眼の前に露子の姿を浮べて見ると——浮べて見るのではない、自然に浮んで来るのだが——頭へ氷嚢を載せて、長い髪を半分濡らして、うんうん呻きながら、枕の上へのり出してくる。——愈肺炎かしらと[29]思ふ。然し肺炎にでもなつたら何とか知らせて来る筈だ。使も手紙も来ない所を以て見ると矢っ張り病気は全快したに相違ない、大丈夫だ、と断定して眠らうとする。〔其〕合はす瞳の底に露子の青白い〔頬〕肉の落ちた頬と、窪んで〔光濡〕硝子張の様に凄い眼があり〳〵と写〔□〕る。どうも病気は癒つて居らぬらしい。しらせはまだ来ぬが、来ぬと云ふ事か安心にはならん。今に来るかも知れん、どうせ来るなら早く来れば好い、来ないか知らんと寐返りを打つ。寒いとは云へ四月と云ふ時節に、厚夜着を二枚も重ねて掛けて居るから、只でさへ寐苦しい程暑い〔程〕訳であるが、手足と胸の中〔□〕は全く血の通はぬ様に重く冷たい。手で身のうちを撫でゝ見ると膏と汗で湿つて居る皮膚の上に冷たい指が觸るのが、青大将にでも這はれる様に厭な気持である。ことに

よると今夜のうちに使でも来るかも知れん。
突然何者か表の雨戸を破れる程叩く〔者がある〕。そら来たと心臓が飛び上つて肋の四枚目を蹴る。何か云ふ様だが叩く音と共に耳を襲ふので、よく聞き取れぬ。「婆さん、何か来たぜ」と云ふ声の下から「旦那様、何か参りました」と答へる。余と婆さんは同時に表〔へ〕口へ出て雨戸を開ける。――巡査が赤い火を持つて立つて居る。
「今しがた何かありはしませんか」と巡査は不審な顔をして、挨拶もせぬ先から突然尋ねる。余と婆さんは云ひ合した様に顔を見合せる。両方共何とも〔云〕答をしない。
「実は今こゝを巡行するとね、何だか黒い影が御門から出て行きましたから……」[30]
婆さんの顔は土の様である。何か云はうとするが息がはずんで云へない。巡査は余の方を見て返答を促がす。余は化石の如く茫然と立つて居る。
「いや是は夜中甚だ失礼で……実は近頃此界隈が非常に物騒なので、警察でも非常に厳重に警戒をしますので――丁度御門が開いて居つて、何か出て行つた様な按排でしたから、もしやと思つて一寸御注意をしたのですが……」
余は漸くほつと息をつく。咽喉に痞へて居る鉛の丸が下りた様な気持ちがする。
「是は御親切に、どうも、――いえ別に何も盗難に罹つた覚は〔□〕ない様です」
「それなら宜しう御座います。毎晩犬が吠えて御八釜敷でせう。どう云ふものか賊が此辺ばかり徘徊しますんで」
「どうも御苦労様」と景気よく答へたのは〔泥棒が〕遠吠が泥棒の為めであるとも解釈が出来るからである。巡査は帰る、余は夜が明け次第四谷に行く積りで、六時が鳴る迄まんじりともせず待ち明した。
〔雨〕雨は漸く上つたが道は非常に悪い。足駄をと云ふと〔下駄〕歯入屋へ持つて行つぎり、つい取つてくるのを忘れたと云ふ。靴は昨夜の雨で到底穿けさうにない。構ふものかと薩〔□〕摩下駄を引掛けて全速力で四谷坂丁迄馳けつける。門は開いて居るが玄関はまだ戸閉りがしてある。書生はまだ起きんのかしらと勝手口へ廻る。清と云ふ下総生れの頬ぺ〔た〕タの[31]赤い下女が俎の上で糠味噌から出し立ての細根大根を切つて居る。「御早やう、何はどうだ」と聞くと驚ろいた顔をして、襷を半分外しながら「へえ」と云ふ。へえでは埒があかん。構はず飛び上つて、茶の間へつか〳〵這入り込む。見ると御母さんが、今起き立の顔をして叮嚀に〔櫻〕如鱗木の長火鉢を拭いて居る。
「あら靖雄さん！」と布巾を持つた侭あつけに取られたと云ふ風をする。あら靖雄さんでも埒があかん。
「どうです、余程悪いですか」と口早に聞く。
犬の遠吠〔も〕が泥棒のせいと極まる位なら、ことによると病

気も癒つて居る〔に相違ない〕かも知れない。〔どうだなと〕癒つて居てくれゝば宜いがと御母さんの顔を見て息を呑み込む。

「えゝ悪いでせう、昨日は大変降りましたからね。嘸御困りでしたらう」是では少々見当が違ふ。御母さんの様子を見ると何だか驚ろいて居る様だが、別に心配さうにも見えない。〔我ー〕余〔も〕は何となく落ち付いて来る。

「中々悪い道です」とハンケチを出して汗を拭〔く。然し〕いたが、矢張り気掛りだから「あの露子さんは――」と聞いて見た。

「今顔を洗つて居ます、昨夕中央会堂の慈善音楽会とかに行つて遅く帰つたものですから、つい寐坊をしましてね」

「インフルエンザは?」

「えゝ難有う、もう薩張り……」

「何ともないんですか」

「えゝ風邪はとつくに癒りました」

[32]寒からぬ春風に、濛々たる小雨の吹き払はれて〔青〕蒼空の底迄見える心地である。日本一の御機嫌にて候と云ふ文句がどこかに書いてあつた様だが、こんな気分を云ふのではないかと、昨夕の気味の悪かつたのに引き換へて今の胸の中が一層朗かになる。なぜあんな事を苦にしたらう、自分ながら愚の至りだと悟つて見ると、何だか馬鹿々々しい。馬鹿々々しいと思ふにつけて、たとひ親しい間柄とは云へ、用もないのに早朝から人の家へ飛び込んだのが手持無沙汰に感ぜらるゝ。

「どうして、こんなに早く、――何か用事でも出来たんですか」と御母さんが真面目に聞く。どう答へて宜いか分らん。嘘をつくと云つたつて、さう咄嗟の際に嘘がうまく出るものではない。余は仕方がないから「えゝ」と云つた。

「えゝ」と云つた後で、廃せば善かつた、〔――〕一思ひに正直な所を白状して仕舞へば善かつたと、すぐ気が付いたが、「えゝ」の出たあとはもう仕方がない。「えゝ」を引き込める訳に行かなければ「えゝ」を活かさなければならん。「えゝ」とは単簡な二文字であるが滅多に使ふものでない、〔と〕之を活かすには余程骨が折れる。

「何か急な御用なんですか」と御母さんは詰め寄せる。〔余は〕別段の名案も浮ばないから又「えゝ」と答へて置いて、〔大きな声でを出して〕「露子さん〳〵」と風呂場の方を向いて大きな声で怒鳴つて見た。

「あら、どなたかと思つたら、御早いのねえ――どうなすつたの、――何か御用なの?」露子は人の気も知らずに又〔人を〕同じ質問で苦しめる。

[33]「あゝ何か急に御用が御出来なすつたんだつて」と御母さんは露子に代理の返事をする。

「さう、何の御用なの」と露子は無邪気に聞く。

「えゝ、少し其、用があつて近所迄来たものですから」と漸く一方に活路を開く。随分苦しい開き方だと一人で肚の中で考へる。

「それでは、私に御用ぢやないの」と御母さんは少々不審な顔付である。

「えゝ」

「もう用を済まして被入つたの、随分早い〔わ〕のね」と露子は大に感嘆する。

「いえ、まだ是から行くんです」とあまり感嘆されても困るから、一寸嫌謙遜して見たが、どつちにしても別に〔□〕変りはないと思ふと、自分で自分の言つて居る事が如何にも馬鹿〔に〕らしく聞へる。こんな時は可成早く帰る方が得策だ。長坐をすればする程失敗〔に終る〕する許りだと、そろ〳〵、尻を立てかけると

「あなた、顔の色が大変悪い様ですがどうかなさりやしませんか」と御母さんが逆捻を喰はせる。

「髪を御刈りになると好いのね、あんまり髭が生へて居るから病人らしいのよ。あら頭にはねが上つてゝよ。大変乱暴に御歩行きなすたのね」

「日和下〔□〕駄ですもの、余程上つたでせう」と背中を向いて見せる。御母さんと露子は同時に「おやまあ！」と申し合せた様な驚き方をする。

羽織[34]を干して貰つて、足駄を借りて奥に寝て居る御父つさんには挨拶もしないで門を出る。うらゝかな上天気で、しかも日曜である。少々ばつは悪かつた様なものゝ昨夜の心配は紅炉上の雪と消えて、余が前途には柳、桜の春が簇がるばかり嬉しい。神〔坂〕楽坂迄来て床屋へ這入る。未来の細君の歓心を得んが為〔と〕だと云はれても構はない。実際余は何事によらず露子の好く様にしたいと思つて居る。

「旦那髯は残しませうか」と白服を着た職人が聞く。髯を剃るといゝと露子が云つたのだが全体の髯の事か〔□頬〕顋髯丈かわからない。まあ鼻の下丈は残す事にしやうと一人で極める。職人が残しませうかと念を押す位だから、残したつて余り目立つ程のものでもないには極つて居る。

「源さん、世の中にや随分馬鹿な奴が〔居〕ゐるも〔□〕んだねえ」と余の〔□〕顋をつまんで髪剃を逆に持ちながら〔云□〕一寸火鉢の方を見る。

源さんは火鉢の傍に陣取つて将棋盤の上で金銀二枚をしきりにパチつかせて居たが「本当にさ、幽霊だの亡者だのつて、そりや御〔□〕前、昔しの事〔の話し〕だあな。電気灯のつく今日そんな箆棒な話しがある訳がねえからな」と王様の肩へ飛車を載せて見る。「おい由公御前かうやつて〔寸〕駒を十枚積んで見ねえか、積めたら安宅鮓を十銭奢つてやるぜ」

一本歯の高足駄を穿いた下剃の小僧が「鮓〔は入らないから〕

ぢやいやだ、幽霊を見せてくれたら、積んで見せらあ」と〔棚〕洗濯したてのタウエルを畳みながら笑つて居る。

「幽霊[35]も由公に迄馬鹿にされる位だから幅は利かない訳さね」と余の揉み上げを〔嗄嚅〕米噛みのあたりからぞきりと切り落す。

「あんまり短かゝあないか」

「〔なに〕近頃はみんな此位です。揉み上げの長いのはにやけてゝ可笑しいもんです。――なあに、みんな神経さ。自分の心に恐いと思ふから自然幽霊だつて増長して出度ならあね」と刃についた毛を人〔指〕さし指〔で〕と拇指で拭ひながら又源さんに話しかける。

「全く神経だ」と源さんが山桜の烟を口から吹き出しながら賛成する。

「神経って者は源さんどこにあるんだらう」と由公はランプのホヤを〔□〕拭きながら真面目に質問する。

「神経か、神経は御めえ方々にあらあな」と源さんの答〔弁〕瓣は少々漠然として居る。

白暖簾の懸つた坐敷の入口に腰を掛けて、先つきから〔なにか〕手垢のついた薄つぺらな本を見て居た松さんが急に大きな声を出して面白い事がかいてあらあ、よつぽど面白いと一人で笑ひ出す。

「何だい小説か、食道楽ぢやねえか」と源さんが聞くと松さんはさう〔と〕よさうか〔と〕も知れねえと上表紙を見る。標題には浮世心理講義録有耶無耶道人著とかいてある。

「何だか長い名だ、とにかく食道楽ぢやねえ。鎌さん一体是や何の本だいと余の耳に髪剃を入れてぐる〳〵廻転させて居る[36]職人に聞く。

「何だか、訳の分らい様な、とぼけた事が書いてある本だがね」

「一人で笑つて居ねえで少し読んで聞かせねえ」と源さんは松さんに請求する。松さんは大きな声で一節を読み上る。

「狸が人を婆化すと云ひやすけれ〔□〕ど、何で狸が婆化しやせう。ありやみんな催眠術でげす……」

「成程妙な本だね」と源さんは烟に捲かれて居る。

「拙が一返古榎になつた事がありやす。所へ源兵衛村の作蔵と云ふ若い衆が首を縊りに来やした……」

「何だい狸が何か云つてるのか」

「どうも、さうらしいね」

「それぢや狸のこせへた本ぢやねえか――人を馬鹿にしやがる――夫から?」

「拙が腕をニューと出して居る所へ古褌を懸けやした――〔存〕随分臭うげしたよ――……」

「狸の癖にいやに贅沢を云ふぜ」

「肥桶を台にしてぶらりと下がる途端拙はわざと腕をぐにやりと卸ろしてやりやしたので作蔵君は首を縊り損つてまご〳〵し

て居りやす。こゝだと思ひやしたから急に榎の姿を隠してアハ、、、、、と源兵衛村中へ響く程な大きな声で笑つてやり〔ま〕やした。すると作蔵君は余程仰天したと見えやして助けて呉れ、助けて呉れと褌を置去りにして一生懸命に逃げ出しやした……」

「こいつ〔は〕あ〔甘へ〕旨え、然し狸が〔褌〕作蔵の褌をとつて何にするだらう」

「大方睾丸でもつゝむ気だらう」

アハ、、、と皆一度に笑ふ。余も吹き出しさうになつたので職人は一寸髪剃を顔からはづす。

「面白〔へ〕え、あとを読みねえ」と源さん大に乗気になる。

「〔是を〕俗人は拙が作蔵を婆化した〔抔と〕様に云ふ奴でげすが、そりやちと御無理でげせう。作蔵君は婆化され様、婆化され様として源兵衛をのそ〳〵して居るのでげす。その婆化され様と云ふ、作蔵君の御注文に応じて拙が一寸婆化して上げた迄の事でげす。すべて狸一派のやり口は今日開業医の用ひて居りやす催眠術でげして、昔しから此手で大分大方の諸君子を胡魔化したものでげす。西洋の狸から直伝に輸入致した術を催眠法とか唱へ、之を応用する連中を先生抔〔と〕と崇めるのは全く西洋心酔の結果で拙抔は〔□〕ひそかに慨嘆の至に堪へん位のものでげす。何も日本固有の奇術が現に伝つて居るのに、一も西洋二も西洋と騒がんでもの事でげせう。今の日本人はちと狸を軽蔑し過ぎる様に思はれやすから一寸〔全〕全国の狸共に代つて拙から諸君に〔□□□〕反省を希望して置きやせう」

「いやに理窟を云ふ狸だぜ、」と源さんが云ふと、松さんは本を伏せて「全く狸の言ふ通だよ、昔しだつて今だつて、こつちがしつかりして居りや婆化されるなんて事はねえんだからな」と頻りに狸の議論を辯護して居る。〔余も大に狸の説〕して見ると昨夜は全く〔に感服して床屋を出る。〕狸に致された訳かなと、一人で愛想をつかし乍ら床屋を出る。

台町の吾家に着いたのは十時頃であつたらう。門前に黒塗の車が待つて居て、狭い格子の隙から女の笑ひ声が洩れる。べるを鳴らして沓脱に這入る途端「屹度帰つて入らつしやつたんだよ」と〔□〕云ふ声がして障子がすうと明くと、露子が温かい春の様な顔をして余を迎へる。

「あなた、来て居たのですか」

「えゝ御帰りになつてから、考へたら何だか様子が変だつたから、すぐ車で来て見たの、さうして、昨夕の事を、みんな婆やから聞いてよ」と婆さんを見て笑ひ崩れる。婆さんも嬉しさうに笑ふ。露子の銀の様な笑ひ声と、婆さんの〔銅〕真鍮の様な笑ひ声と、余の銅の様な笑ひ声が調和して〔□〕天下の春を七円五十銭の借家に集めた程陽気である。如何に源兵衛村の狸でも此位大きな声は出せまいと思ふ位である。

気のせいか其後露子は以前よりも一層余を愛する様な素振に

見えた。津田君に逢つた時、当夜の景況を残りなく話したら夫はいゝ材料だ僕の著書中に入れさせて呉れろと云つた。文学士津田真方著幽霊論の七二頁にK君の例として載つて居るのは余の事である。

二　加筆修正の考察

本節では、「琴のそら音」完成原稿の削除、書き直し、加筆の方向性とその意義について、（一）説話的構成、（二）恐怖体験の描き方、という二つの観点からまとめておきたい。

（一）説話的構成に関する手入れ

本作のあらすじは次のようにまとめることができる。主人公であり語り手の〈余〉は〈心理学者〉津田君の話によって幽霊が〝科学的に〟証明された存在であることを知り、その夜婚約者露子の死を暗示するかのような様々な無気味な気配に脅かされる。だが翌朝には露子が無事であったことがわかり、床屋の庶民たちのやりとりを聞いて、自分が「化かされた」状態にあったことに思い至る、という物語である。つまり本作は、たとえば『徒然草』第八九段「猫また」のように、説話の一種の類型である〝人から聞いた話に囚われて自ら「化かされ」た人の話〟を語る怪談／滑稽譚として構成されているのである。

こうした説話の形態においては、「化かされる」原因と、それが錯覚であったという結末の種明かしとが明示されることで、因果関係が明瞭になり物語の筋がわかりやすくなる。本作の作者は、この点について意識的に手入れを行っていると見ることができる。

〈余〉が「化かされた」原因は津田君の幽霊論を聞いたことにあったわけだが、そもそも〈余〉が津田君の言葉を信じざるを得なかったのは、津田君が学校制度における成績上位者であったこと、また〈心理学者〉であるというアカデミズムにおける専門性に拠るのであった。こうした津田君の位置付けを強調するために、作者は原稿第三葉では〈所有と云ふ事と愛惜といふ事は大抵の場合に於て伴なうのが原則だから〉という〈心理学的〉な説明を加筆し、また第一三葉では津田君が高等学校で成績上位者であったことを〈常に〉と加筆している。また津田君に対して〈恐れ入つて居る〉とする際にも、彼の〈頭脳〉に、という一語を加えることで、津田君の学問的優位性を強調している。さらに、作者は第一五葉では、信じ〈なければならぬ様に〉なる、と加筆することで、津田君の話が〈余〉に抗いがたい効力を持っていたことを示そうとしている。

結末においては、〈余も大いに狸の説に感服して床屋を出る〉という記述が抹消され、〈して見ると昨夜は全く狸に致された訳かなと、一人で愛想をつかし乍ら床屋を出る〉に書き直されている（第三七～三八葉）。書き直し前の記述では人が「化かされる」

のは所詮本人の〈神経〉の問題に過ぎないとする〈狸の説〉に納得した、ということを示しているだけであった。しかし書き換えによって、〈狸の説〉を昨夜の自分自身の体験に照らし合わせてみると、自分もまた気の持ちようから怯えていたに過ぎなかったのだという、〈余〉の自覚を示すものに変わっているのである。これは、語り手の〈余〉自身に「化かされた」ことの原因を認識させ、恐怖体験が錯覚に過ぎなかったという結論を〈余〉の自覚のレベルで示そうとする書き換えと言えよう。さらに第三八葉では、露子と婆さん、余の三人の笑いに対し、〈如何に源兵衛村の狸でも此位大きな声は出せまいと思ふ位である〉という一文を付加することで、昨夜の恐怖体験を「錯覚」として笑いに付し、晴れやかな現実に充足する〈余〉を描くことで、事件の解決と終息を明示しているのである。

このように本作の作者は、作品の説話的な枠組みを明確化するための手入れを行っていると言えるだろう。

(二)〈余〉の恐怖体験に関する手入れ

また本作においては、〈余〉が無気味な気配に怯え恐怖に陥っていく過程がやや冗長なまでに詳細に語られているが、こうした〈余〉の心理の道行きを緻密に描き出すために複雑な手入れが数多く加えられている。

まず第一〇葉においては、津田君の声について、〈突然〉、〈低い声で云つた〉、耳の底〈をつき抜けて〉と言った表現を加え、また第一一葉では津田君の眼をのぞき込む様に〈熱心に〉という修飾を付すことによって、津田君の語りに心理的な揺さぶりをかけられ、次第に囚われていく〈余〉の心情の変化を具体的に描き出そうとしている。さらに第二六葉では、風に乗って響いてくる犬の鳴き声が、風とともに微妙に変化する様を描き出すために細かな書き直し、加筆が行われている。また第二七葉では不可解な状況に怯える〈余〉の心情を〈骨は急に柔らかにな〉つた、という表現を削除し、〈脊髄が急にぐにやりとする〉という、具体的な〈骨〉の名称、擬音表現に置き換えることで、より実感をもって表現しようとしている。

こうした手入れは、〈余〉が津田君の主張するような〈幽霊〉の存在や〈死〉の気配に留まらず、漠然とした無気味な気配そのものによって恐怖に追い込まれる様を強調するために行われている。怖れを抱き、五感が敏感になっている状態において、普段は気にならなかったような風の音や犬の鳴き声の微細な変化そのものに、得体の知れない無気味な気配を感じ取っていく様を、より緻密に描き出そうとしているのである。

このことは第二〇葉で、〈死の影〉に閉じ込められる〈余〉という存在が〈消滅しさう〉といった、〈死〉や〈幽霊〉に関わる表現を排除することで、〈夜と云ふ無暗に大きな黒い者〉が迫ってくる気配を前景化し、怖れの対象をより漠然とした気配その

ものに抽象化していることにも顕著に表れている。

以上のように原稿の手入れ箇所を読み解いていくと、説話的構成を前景化し、無気味な気配に脅かされていく過程を詳細に描くことで、人間の根源的な恐怖の感覚を描き出そうとする作者の意図を読み取ることができるのである。

【注】

（1）原稿第二葉の写真が全集巻頭に口絵として掲載されている。

（2）自筆と思われるノンブルは、本文が開始される原稿第二葉から第五葉までは、各頁用紙右上に順に「1」～「4」まで付されているが、以降の頁にはこのノンブルはない。編集者によると見られる薄朱筆のノンブルは、用紙中央右よりの位置に、原稿第一葉から順に「34」～「70」まで番号が付されている（なお、原稿第一〇葉には「43上」、第一一葉には「43下」とあり、第一二葉以降は再び「44」以降の数字が各原稿に付されている）。

（3）蔵書印は、第一葉右下（二～四行目）に朝日新聞社元社主上野精一の「上野蔵書」、第二葉右下（氏名の下）に第一葉とは異なるが印だが、同じく上野精一の「上野蔵書」がある。また、第三八葉左下（二二～二三行目）に第二葉と同じ上野精一の蔵書印、欄外左下に、弘文荘の蔵書印「月明荘」が押印されている。

（4）原稿用紙右側の中央（六・七行目）に大きく「琴のそら音」と書かれ、その左下（八・九行目の間）に氏名「夏目嗽石」が、さらに一〇行目に「三十八年四月稿」と記されている。タイトル及び「三十八年四月稿」は黒ペン、氏名は墨筆で別人の筆と思われる。「嗽」の字の偏は墨筆で消されているが、口偏である可能性が高い。「三十八年四月稿」は氏名と同じものと思われる墨筆で削除線が引かれている。タイトルの前（二行目）に薄朱筆で「（裏白）」とあり、さらに同じく薄朱筆でタイトルの後に氏名をつなげる線がある。また、薄朱筆でタイトルと氏名を括り、「3」、「中央ニ刷ル」とある。

（5）原稿用紙一・二行目の間に墨筆・別人の筆でタイトル、氏名があり、薄朱筆でタイトルを括って「3」、氏名を括って「4」とある。第一葉と同様、「嗽」の字の偏は墨筆で消されているが、口偏である可能性が高い。

（6）漱石はこの字を「出」＋「宗」（「崇」の「示」を「宗」にした形）で記述している。以下も同様。

（7）この頁枠外右側に「来たぜ」「な」「せつ□□」と書かれている。おそらく試し書きか。

（8）朱筆で加筆されている。

（9）「男」という字を書きかけて途中で削除したと見られる。